

赤目大瀧

心中來遂

大西 滝次郎
寺島 しのぶ
大楠 道代
内田 裕也

少年	びの	山根	香公	大巡礼	大巡礼	娼婦	戦り	能く	魯平	夏田	星	成し	生島手一
森山	江森	金子	森下	上杉	牧口	除沢	神山	大村	根田	大森	新井	寺島しのぶ	大田隆次郎
一裕	神男	清文	幸幸	幸子	元美	菊子	秀子	琥珀	音斗	瑞太	浩文		
岸田幸子	岸田幸子		新世界	三自取	祇園路	出陣鬼	妓女遊説	土登花道冒	流島度富	冒筆の男	桃太郎	不動神主	秘伝の男
内田裕也	大楠道代			赤井	渡辺	厚	秋山	丸山	全堂	博史	小島	狸穴番五郎	武田 信哉
				英和	謙作	赤兒	晴夫	上本	修一	修一	史		

[illegible]

映画『赤目四十八瀧心中未遂』について

車谷長吉

一冊の本を読み終った瞬間、も一度はじめから読みたくなる本がよい本だ。映画は観終った瞬間、も一度観たくなる映画がよい映画だ。平成十五年七月二十九日、東京五反田のイマジカで、映画『赤目四十八瀧心中未遂』の試写を観た。私が書いた小説「赤目四十八瀧心中未遂」(文藝春秋刊)より凄くと思うたのが、まず偽らざる私の感想だった。一般に小説を映画化する、大抵は原作に及ばない。がっかりした、というのが、長い年月私の頭にこびり付いた固着観念だった。それを荒戸源次郎監督の映画『赤目四十八瀧心中未遂』は見事に破って下さった。嬉しい。



解説

車谷長吉氏の『赤目四十八瀧心中未遂』(文藝春秋刊)が、第一一九回直木賞を受賞したのは、平成十年七月。その半年前、刊行直後に読んで感動した荒戸源次郎は、車谷氏に映画化を申し出て快諾を得た。そこから、原作と四つに組んでの荒戸源次郎のシナリオ作りが始まった。初稿、二稿、三稿……と骨身を削るように推敲を重ねて四年。

平成十四年三月、製作母体・赤目製作所が立ち上げられた。八月八日にクランク・イン、十月五日に主要な撮影を終了。その後十一月、翌十五年二月、さらに四月と、撮影は延べ九カ月にわたって完了。編集・仕上げに三カ月を費やし、ここに映画『赤目四十八瀧心中未遂』が完成した。

本作でまず注目されるのは、選り抜かれた俳優陣であろう。

すでに舞台で、稀にみる大器として高い評価を得ている寺島しのぶが、ヒロインの綾として映画初主演を果たす。生きる目的を失い、この地に流れ着いた男が、綾に惹かれ、至福の時を味わい、やがて死出の旅路へと導かれる。寺島しのぶが、そのようなファム・ファタールを華麗に体現する。

対する主人公・生島与一を演じるのは、新人・大西滝次郎。アパートの一室で臓物捌きに日を送りながら、古の少年のような純で一徹な心を見失わない男。そんな男には、日本刀の底光りする艶をもつこの新人こそ適役。

そして、この世界の先達として生島を導き、保護する焼鳥屋「伊賀屋」の女主人・勢子ねえさんを演じるのが、大女優・大楠道代である。荒戸源次郎が、この役は大楠さんしかないと思いつき、彼女次第で撮影スケジュールの変更も辞さないまで考えていただけあって、大楠道代によつて、勢子という存在は、原作よりも大きく膨らんだといつていいだろう。

綾の男であり、生島が踏み込めない向こうの世界にいながら、常に生島の動静を掴んでいるかのような刺青師・彫彫に扮するのが内田裕也だ。安食堂でコップ酒を飲んでいるだけで、ただならぬ殺気を漂わせてしまうのは、内田裕也ならではのう。

脇役陣も充実している。豊田利晃の『青い春』で鮮烈な印象を残した新井浩文が演じる犀という男の全身からは、この世界への闘入者・生島に対する敵意が立ちのぼるし、大楽源太扮する綾の兄が一瞬のうちに見せる表情の変化には、狂気が宿っている。さらに、ところを得た赤井英和、磨赤児、渡辺謙作などの男たち。沖山秀子、絵沢萌子、内田春菊が演じる三人の娼婦と、いずれも、異世界の怪しい風を巻き起こす。

撮影は、一作ごとに新しい試みをしてきた笠松則通が、初めてのシネマスコープ撮影に挑戦した。また音楽の千野秀一と録音の柿澤潔が連携して音の側から、画面に奥行きと広がりを創りだしている。

一人称で書かれた原作が、主人公の意識の流れに沿って世界が開かれていくのに対して、映画『赤目四十八瀧心中未遂』は、むしろ世界の側から主人公を捉える。生島が歩く路地。彼が臓物に串を刺している四畳半の部屋。隣で交合する男女の声。廊下や階段ですれ違う女や男。荒戸源次郎は、そんな世界を、あたかも、六道の辻のようにして、われわれの前に差し出す。そこでは、この世の表と裏、生と死、美と醜が行き交いすれ違う。そして、そんな六道の辻の一角で己を捨てたつもの生島の前に、天から舞い降りてきた迦陵頻伽が至福の歡びを与える。ならば、どうして彼女が誘う「この世の外」への旅に同道せずにいられよう……。



大西滝次郎 Takahiro Oishi

『赤目四十八瀧心中未遂』が発見した新星。いきなり主役に抜擢され突然のスポットライトを一身に浴びた大西滝次郎だが、渾身で主人公・生島与一になりきった。笑顔よりも悲しみが似合う面差しには、どうにもならない頑なさがにじむ。そんな男の気配をかつては色気と呼んだ。

この世に自分の居場所がない男、生島与一は綾の「この世の外へ」という一言に誘われて、死出の旅路。赤目四十八瀧を登っていく……



寺島しのぶ Shinobu Terajima

映画化の話もない頃から、車谷長吉の直木賞受賞作『赤目四十八瀧心中未遂』に魅入られた女優がいた。寺島しのぶである。

一九七二年、歌舞伎の名門に生まれた彼女は、舞台での華々しい活躍により、一九九六年度芸術祭賞新人賞を受賞。その後も菊田一夫演劇賞など、数多くの賞を受賞。現在、最も注目を集める女優である。

『赤目』のヒロイン綾ちゃんに乗り移ったとは思えない寺島しのぶは鮮烈!



大楠道代 Michino Ohsu

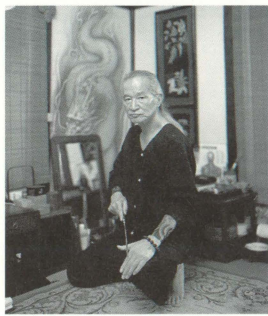
大映時代に安道代の名前で『氷点』『痴人の愛』など、看板女優として数多くの映画に出演。八〇年『ツイゴインエルワイゼン』では、日本アカデミー賞最優秀助演女優賞、キネマ旬報助演女優賞など多数の賞を受賞。『陽炎座』では松田優作と主演を担った。その後も『愚か者傷だらけの天使』、『顔』に出演。妖艶で気品と知性に溢れる名女優。

生島が流れ着く尼崎の焼鳥屋「伊賀屋」の女主人・岸田勢子を見事に演じる。

内田裕也 Yuya Uchida

『永遠のロックンローラー』内田裕也の才能は、映画においても異彩を放ち、出演のみならず、企画・製作・脚本も手掛ける。八六年『コミック雑誌なんかいない』では、キネマ旬報主演男優賞、報知映画賞最優秀作品賞、主演男優賞、ブルーリボン特別賞、毎日映画コンクール脚本賞(高木功・内田裕也)を受賞。NY近代美術館での上映、NYタイムスで二度にわたる掲載など、海外での評価も高い。『赤目』では異形の刺青師・彫彫で塩気のある演技を見せる。

上野昂志



◆映画『赤目四十八瀧心中未遂』公式サイト <http://www.akametworks.com>

“赤目”圧勝! 映画賞20冠超! 全国拡大! 生誕の地へ“赤目”再上陸!!

4 / 3[土]—4/16[金] 10:30 13:20 16:10 5/8[土]—5/21[金] 12:40 15:45 18:50

4/17[土]—4/30[金] 19:30 特別鑑賞券1,500円(税込)劇場窓口・チケットぴあなどにて発売中

※4/13(火)16:10の回は休映

第七藝術劇場
阪急・十三駅西口より徒歩3分 06-6302-2073

シネカノ神戸
JR神戸駅 ハーバーランド・プロメナ神戸9F 078-367-3868